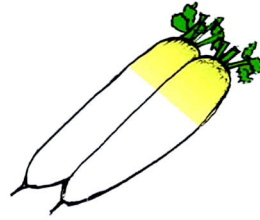


# ダイコン「喜太一」の 優良産地の栽培事例



雪印種苗㈱ 千葉研究農場

松井 誠 二

## 1 はじめに

本年の春ダイコンの作柄と相場を振り返ってみますと、一般地、暖地のトンネル栽培においては、暖冬の影響で全体に品質は良かったものの、以前からの価格低迷や露地冬ダイコンの豊作により、前半は市場相場がつかず農家の皆さんは納得のいかないところでしたが、後半の5月前後になってから高騰するという展開になりました。その後東北、高冷地に移ってからは、春先からの異常気象の影響で品不足傾向となり相場は高値を維持し、高冷地産地の気象、栽培条件等の違いがダイコンの品質、出荷量に反映される結果となりました。

そのような中、多くの産地で春ダイコン『喜太一』を栽培して頂きましたが、いくつかの事例を紹介致します。

## 2 産地での『喜太一』栽培事例

### A) 群馬県片品村の例

当産地ではマルチを利用した栽培方法で、春、夏、秋ダイコンを連続的、安定的に出荷しています。喜太一は春の4月播きとして作付けされました。以前の品種では、萎黄病の発生が問題視され、また、ひげ根も多かったのですが、喜太一は萎黄病に強く、良品を生産、出荷することができました。栽培面では春先の抽苔を考慮して播種を行い、肥料は従来よりもやや多めとして62日前後で収穫するように努めて頂いています。また、歴史ある産地ゆえに土作りに熱心で、ダイコン収穫後にはライ麦『ヘイオーツ』の栽培、すき込みが行われています。

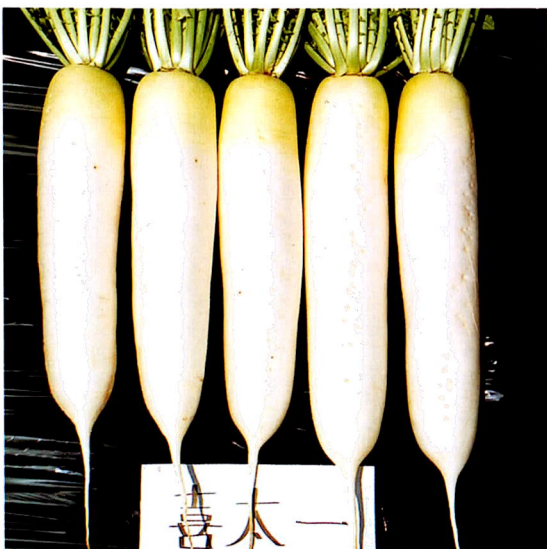


写真1 極晩抽性で根形がきれいに揃う



写真2 予冷を終え、出荷を待つ（群馬県片品村）



写真3 洗い上がりがきれい(熊本県蘇陽町)



写真4 トンネル～ベタガケ～マルチ栽培に向く(青森県下田町)

### B) 熊本県蘇陽町の例

当産地は阿蘇山麓の黒色火山灰土壌を中心にダイコンの栽培が行われ、長期に渡り市場出荷が行われています。以前使っていた春ダイコンは抽苔が遅いものの、萎黄病、生理障害、品質低下が指摘されていましたが、喜太一は萎黄病に強く、高品質で良く揃っていました。栽培はマルチとし、地温の確保の他に肥料の流亡防止に役立っています。喜太一の遅播きは施肥をやや少なめにしています。来年はべたがけを併用した早播きも検討したいとの意欲的な意見でした。

### C) 青森県下田町の例

当産地はトンネル資材を使った春ダイコンの栽培が盛んで、青森県の中では早くから出荷が始まります。喜太一はトンネル栽培を主体にマルチ栽培まで生産、出荷が行われ、品質が良いとの評価を頂いております。トンネルマルチ作型は早春の気温上昇を利用して行われる栽培であり、当地の気象条件に適した栽培といえます。また、4月中・下旬頃以降の播種はトンネル被覆しないまでも、春先でまだ冷え込む時期でもあり、透明マルチの上にべたがけを被覆し、抽苔の予防と初期生育の促進としています。また、5月の播種は近年の異常気象を考慮した抽苔防止対策が重要で、播種準備、播種時のべたがけの有効利用が出荷量確保の前提になります。また、当地域はニンジン、ナガイモ、キャベツ、ゴボウなどの輪作体系が生まれ、



写真5 高原での露地栽培(青森県新郷村)

ダイコンの連作障害が比較的出にくい産地でもあり、一方では、野菜の機械化収穫に着手している産地でもあり、今後、注目されるところです。

## 3 おわりに

本年の各産地の喜太一の栽培状況を紹介しました。産地ごとに気象はもちろん、栽培方法も異なりますが、各産地で喜太一の品種特性を十分に発揮されるよう、来年の栽培にあたり、参考にして頂けたら光栄です。